

御園生翁甫著

大内氏史研究

地方史研究は戦後全国的に隆盛を来したが、その中でも山口県などは、戦前からの伝統を承けて、その最たるものではないか。戦前の防長史談会、戦後の山口県地方史学会の活躍は周知のところ、就中特筆さるべきは、全国に魁けて昭和三四年四月山口県文書館を設立し、県内の文書史料類の恒久的保存と整理に乗り出したことであろう。

こうした隆盛のよつて来る所、色々な事情があげられようが、その一つに大内氏の存在が考えられはしないだろうか。いう意味は、大内氏が、①在庁官人の武士（守護・守護大名）化した典型として、②倭寇や対鮮・対明貿易等対外関係における立役者として、③雪舟・宗祇等文化人を招聘し、西の京都といわれた山口を中心とする地方文化の形成者として、等々、つまり古代・中世を通じ政治・社会経済・文化等凡ゆる方面に互つての豊富な素材を提供しており、そのことがいわば県内多数の研究者共通の素材・課題となつたから

ではあるまいか。されば大内氏に関しては、近藤清石が明治十八年『大内氏実録』（五冊）を著わして以来多くの人々によつて取上げられて来たのであり、かかる伝統と環境に於ける最近の成果というべきものが、実に本書なのである。

後記にあるごとく、本書はもと御園生氏が山口図書館に寄贈された稿本を、より広く役立たしめるために、前記山口県地方史学会の会員を中心とする有志によつて公刊されたものであるという。氏は『防長地名淵鑑』『防長造紙史研究』等、実地踏査に基づく歴史地理的研究や県内産業史の実証的研究にすぐれた業績をあげて来られた人であるが、前記『大内氏実録』の不備に触発されて大正初年から大内氏の研究に志されたといひ、そのご発表された諸論考をもとにして大内氏の通史を構成せんとされたのが本書であるという。尤もこれには二八代教弘までを取め、それ以後最後の三一代義隆までは続編にゆだねられているが、ひろく関係史料を渉猟して書かれた、大内氏通史の決定版といふべきものであらう。とくに地名考証等は安心して従えるのである。全体の叙述は、とくに問題を提起す

るといふ体裁はとつていないが、その客観的な、淡々と述べられている文章の行間に、氏の多年にわたる研究成果が凝集されているといふべきである。

もつともそのことが読む者に対して物足りなさを与えるものでもある。大内氏の研究ははじめに述べた意味でも、防長史乃至山口県史と等置される程の役割りをもつているといえるが、しかし大内氏史の研究と銘うつた以上、その防長史概説に終始したのは如何であらう。もう少し大内氏自身に限定し、その発展に視点をすえて叙述されてよかつたのではないか。さもなければ、以前に出版された通史『山口県文化史』の中世版となりかねない。氏は明治八年のお生れというから、今年ですでに八五歳になられたことになる。今後共健康に留意され、続編を一日も早く完成されると共に、この上なお山口県地方史学に活躍されんことを、遙かに願うものである。

（A5判四二四頁 一九五九年六月大内氏史研究刊行会 定価八〇〇円）

（村井康彦）